

妻逝きて探す肌着や冬隣り

飯島愛治

【評】

悲しい句である。長年連れ添った妻に先立たれた夫の困惑する日常。こんなに

悲しい句を市長賞に推しているものか、正直言って迷った。しかし、万葉集の昔から相聞歌と並んで挽歌という部立がある。そして今も語り継がれる名歌が残る。

そう思い到り、挽歌ならぬ挽句も、多くの方に読んで欲しいと決めた。この句、

「探す肌着」と具体的に表現したところが優れている。「冬隣り」という季語に、作者の悲しみの心が託されている。